「忍ぶずり」を妄想する

永津 禎三

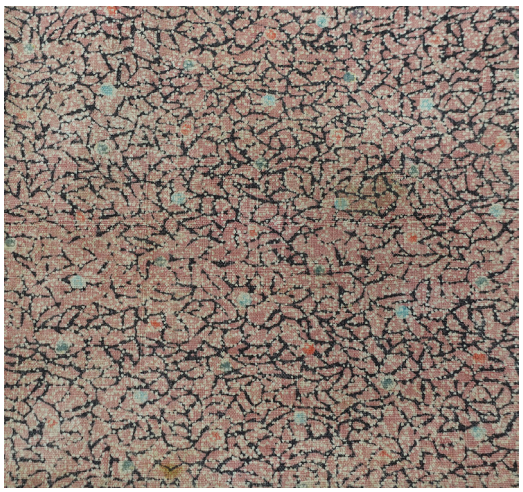
〈桃色地小紋文様紅型木綿衣裳〉を熟覧した 5 月 13 日の見学会の帰途、禮子さんはしみじみと、「あの氷割れの地紋を黒で差しているのは凄い…、どうしてあんな発想が出来るんだろう…」と感心し続けていた。

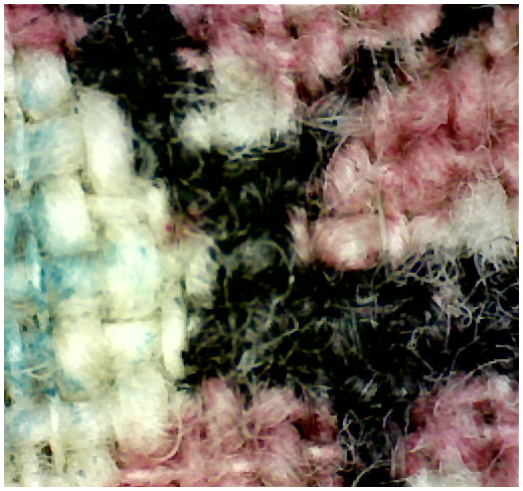
確かに、この衣裳を初めて観た東京国立博物館の展示会場での印象としては、あんなに黒々としっかりした墨が差されているとは感じていなかった。もしかしたら、展覧会図録の作品写真の墨色が薄墨のような色になっていたから、それによって私の記憶が修正されてしまっていた、ということもあるかもしれない。

沖縄県立博物館･美術館での見学会で間近に衣裳を見ることができ、真っ黒の墨がしっかりと乗っているのに驚いた。マイクロスコープで見ると、そのしっかり具合は更に強烈で、これは引き染めなんかではあり得ない、しっかりと摺り込まれた墨なのだなと確信した。

ところが、ある程度距離を持ってこの衣裳を眺めれば、墨色を強く感じることは決してない。本当にデザインの妙だと思った。

点状の唐草や小桜文が型紙で糊置きされたのが工程の最初なので、白上げしたそれらの点や小桜文で氷割れの黒が途切れがちになっていることもあるだろう。それも含めて、この細かな柄が重なり合ってまさに「朧」な効果を生むことを、どうやってデザイン出来たのか不思議でならないと二人で感心し合うばかりだった。





それから 4 日ほどして、古典文学の萩野敦子先生と会食していた時、この見学会の話題になった。〈水色地菱繋ぎに松梅楓鳥模様衣装〉に「忍ぶずり」が施されているとお話ししたら、古典文学で「しのぶずり」って出てくるけれど、これのことだったんですか？」と仰った。

すぐには、分からなかったが、何か違いそう、紅型の「忍ぶずり」という言い方はどこからきているんだろうと、ぼんやり思った。

以前の小論考『国宝〈水色地菱繋ぎに松梅楓鳥模様衣裳〉紅型制作手順の考察』でも参照した渡名喜明「紅型の型置きから仕上げまで －城間栄喜ノートをもとにして（その２）」沖縄県立博物館紀要第 5 号 , 1979 には、次のような記述があるのみで、「忍ぶずり」と言われるようになった由来については書かれていない。

染地型の作品で , 桜や貝などがただ彫り落とされた形になっているものを「チリウトゥーサー（切り落とされたもの）と呼ぶ。これを白抜きのままにしておくと , その模様だけ白く浮きたって見えるために行われるのが「シヌブズイ」（忍ぶずり）である。生地を地染めし , 糊を洗い落としてからその模様に刷毛で隈をとったり ,「キガチ」で花芯を入れたりすることをいう。

数日経って、朝早くに目が覚めてしまったら、このことを思い出した。気になりだしたら目が冴えてしまい、古典文学での「しのぶずり」を調べてみた。

学研全訳古語辞典によると、

しのぶ－ずり【忍摺り・信夫摺り】　名詞

「摺（す）り衣（ごろも）」の一種。石の上に布を置き、「忍草（しのぶぐさ）」の葉・茎を摺（す）りつけて乱れた模様を出したものという。一説に、陸奥（むつ）の国の信夫（しのぶ）郡（＝今の福島市一帯）に産する織物の模様ともいう。「忍（しのぶ）」「忍綟摺（しのぶもぢず）り」とも。

忍草について調べてみると

忍草（しのぶぐさ）

しのぶ科の羊歯植物で、土が無くても耐え忍んで育つ事から「忍草」と呼ばれています。

根茎と苔とを丸めて軒下にぶら下げ、そよ風に揺れる姿で涼をとる「吊り忍」は夏の風物詩です。

「百敷（ももしき）や　古き軒端（のきば）のしのぶにもなほあまりある　昔なりけり」

貴族の時代の衰退期に詠まれた詩で、かっての栄華を「偲ぶ」思いと、荒れ果てた家軒に良く見る「軒忍」の意味が掛けられています。（山崎商店 web ページ）

更に、信夫文知摺「しのぶもぢずり）を調べていたら、百人一首の河原左大臣の歌が出てきた。

陸奥（みちのく）の　しのぶもぢずり　誰（たれ）ゆゑに　乱れそめにし　われならなくに

幼い頃からお正月に家族や親戚で百人一首をしていたので、「陸奥の…」と詠まれたら「みたれそめにし」を探すという感じで聞き覚えのある歌だったが、そういえば、ちゃんと意味を考えていなかった。「しのぶもぢずり」が「信夫文知摺」という一つの言葉とは思っていなくて「しのぶ」「も」と「ぢずり」に分かれていて「ぢずり」は意味は分からないが、そういう言葉があるんだろうと勝手に考えていた。

三十歳台の初めの頃、友人の三歳くらいの息子が「渡る世間は鬼ばかり」を「ワタル石鹸は鬼ばかり」と思い込んでいるという話をしていて、ワタル君のお風呂場にシャボンの泡だらけの鬼がウヨウヨいる光景を思い浮かべているのかな、可愛いねと笑っていたが、七十歳にもなるまで「しのぶもぢずり」で三歳児と同じだった訳だ。

この和歌の解説の最後にはこんなことも記してあった。

この「しのぶもぢずり」を作るのに使った「文知摺石」は、今でも福島県信夫郡に残っています。江戸時代には、「奥の細道」の旅行では、松尾芭蕉が信夫の里に寄り、この石を見ていったという記述があります。

写真もあった。結構大きな石（岩）だ。

桃色の螺旋状の花、ネジバナを別名「モジズリ」と言い、語源はその形状から「信夫文知摺」であろうとも記されていた。

この大きな石の上に布を置き、忍草を摺りつけたらどんな模様になるのだろう。ネジバナのような模様が重なり合い捩れ合うような模様なのだろうか。

残念ながら、信夫文知摺がどのようなものだったのかは、現存せず分かっていない。

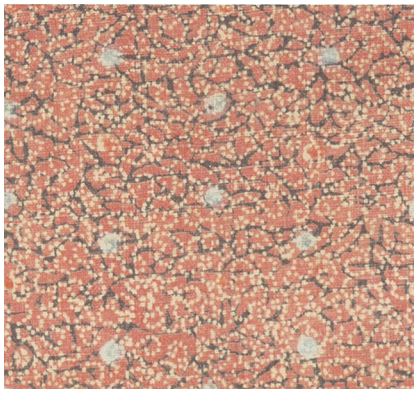
ゆっくり起きてきた禮子さんに「こんなことを調べていた」と言うと…

「だから、私は、「朧型」ってどうしてああいう模様になったのかが不思議なのよ…。
元々は、岩に擦って出来た、捻れた「羅」みたいな模様なのじゃないかと思っていたの。
それを重ねて摺っていたのが始まりじゃないかなと…」

「沖縄の紅型の忍ぶずりと古典文学に出てくる忍摺との共通点は、直接摺り込むということだけだと思っていたんだけど、違うかもね…。
つまり、禮子は、沖縄の「朧型」というのが、実は元々は忍摺（信夫文知摺）であると考えているんだね。
そして、そこに施されることがあった、型紙を使って直接色材を摺り込むことの方を「忍ぶずり」と呼ぶようになったんだと…」

「そうとしか思えない。」

朝の我が家は、「忍ぶずり」妄想の世界となった。



「忍ぶずり」を妄想する

著者：永津禎三

私家版

2024 年 5 月 27 日発行